

# 水とハイテクの融合を目指す出雲のベンチャーエンタープライズ

## 小松電機産業

▼▼昭和六十年に発売したシートシャッター「門番」の大ヒットで小松電機産業は島根県出雲の一地方メーカーから一躍全国区に躍り出た。平成四年には上下水道の遠方監視システム「やくも水神」を開発。小松昭夫同社社長は出雲にベンチャー企業ありきという神話をつくろうとしている。

### 三万台の大ヒットになつた「門番」

勤めていた会社が会社更生法を申請

請。このときから小松電機産業社長の小松昭夫氏の運命は大きく変わった。後から見れば、それが島根県有数の企業を生み出す一つのきっかけになつたのだから、人生何が幸いするか分からぬ。

小松氏は昭和十九年島根県生まれの五十歳。三十八年松江工業高校機械科を卒業後、エンジニアを志向

し、農業機械の佐藤造機(現・三菱農機)に就職する。同社中央研究所で、朝から夜中まで農業機械の設計・開発に従事していた。

「注文があれば何でも挑戦した」と言うように、どんな仕事でも引き受けたので、信用を得るようになる。やがて修理業からポンプ販売に手を広げる。

四十八年、小松産業を設立。水道の給水施設を自動制御する計装システムをはじめ、排水制御盤、電機制御盤、冷凍機制御盤などの各種制御盤を製作。創業時から技術力では定評があった。

## 他の追随を許さない技術・開発力

小松電機産業の名が全国に知れ渡

一顧だにされなかつた。とはいゝ、佐藤造機の成長と没落の両方を経験したこととは、のちの企業経営に教訓として生かされる。

四十六年に佐藤造機が会社更生法を申請し、それを機に八年間在籍していた同社を退社する。「一生、エンジニアをやるつもりで、会社をつくる気持ちは全くなかつた」小松氏の運命が大きく変わる。

大阪の商社や設計事務所に二年間勤務。島根に戻つて、最初は実弟の光雄氏(現・小松電機産業専務)と二人で資金十万円で修理業を始める。担当は小松氏が機械、光雄氏が電機だった。

「門番」は物体が近づくと超音波センサーが感知してシャッターが巻き上げり、通過すると閉まるビニール製の自動開閉式シャッター。車から降りずに短時間で開閉でき、防寒、防風、防塵に優れ、作業の効率アップや安全性の向上に役立つ。

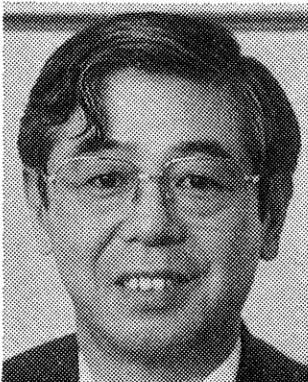
文化シャッターと提携して全国で本格的に発売したところ、今までに例のない画期的な商品として大ヒット。採用する工場は後を絶たなかつた。現在までのところ、十年間で累計三万三千台の売れ行きを記録し、韓国では現地生産も行つてゐる。

そもそも「門番」は、三菱農機から特殊なシャッターをつくつてほしいという依頼を受けて製作したことから始まつた。シャッターの製作には気乗り薄だつた小松氏も、出来上がつた製品の質に太鼓判を押され、本格生産に踏み切つたのである。

るきつかけを与えたものの、小松氏

五十七年に小松電機産業に改組するが、転機となつたのは六十年に発売した高速シートシャッター「門番」の大ヒット。おかげで同社は島根県のローカル企業から全国区の企業へと脱皮することができた。

# ニュービジネスの旗手



小松昭夫氏

は「門番」を派生商品と位置づけている。なぜなら水道計装装置の電子制御技術を応用してつくられたものだからである。

「門番」はそれまでの生産設備をそのまま使えたからつったんだ

す。でも、こんなに売れるとは夢にも思いませんでしたよ」（小松氏）

小松電機産業の原点はあくまでも「水」である。「これからは『水の時代』だ」と小松氏は力説する。

「人間のいるところに常に水があります。しかし、現実には水の汚染が進み、放つておけば人類の危機につなが

ります。当社の技術を改良してきれいな水のある生活を実現させたいですね」（小松氏）

その神髄は、水道計装システムのノウハウを結晶させ、平成四年に開発に成功した上下水道の遠方監視システム「やくも水神」。同社が「門番」に次ぐものとして期待をかけている商品である。

「やくも水神」とは、浄水場、配水池、ポンプ場、処理場を公衆回線で結んで、各施設の濁度、塩素濃度、有機汚濁度などを、役所などの遠隔地からでも一括で監視でき、異常があればただちに知らせるシステム。最大十五施設、五十ポンプ場の管理が可能である。

開発のきっかけは、宍道湖の淡水化計画の中止にある。宍道湖の水は塩分が濃く、場所によって濃淡に差があるので、農業用水として適さない。そこで自治体から塩分が薄いときはポンプを作動させ、濃くなったら止めるようになってできるシステムの開発を依頼される。

同システムは現在、琵琶湖をはじめ、全国各地で採用されている。昨年には窒素・リンを九〇%除去できる「NEWやくも水神」を開発。

小松氏が開発した商品は「門番」

といい「やくも水神」といい、常に独自性、アイデアに富んでいる。商品開発のコンセプトは「世の中で受け入れられる商品をつくることにある」という。

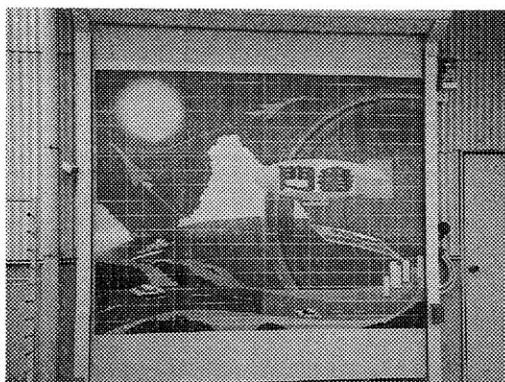
九五年七月期の売上高は三十三億円（予想）。売り上げは結果にすぎないと考える小松氏はいたずらに規模拡大を急いでいないが、株式の上場を目指している。

小松氏は小松電機産業の将来像を「社会システム産業」ととらえ、治水を中心とした人と水とハイテクノロジーが融合する企業を目指している。本来なら自治体が取り組むべき仕事を

「新しい時代を切り開いていくのに出雲はいちばんふさわしいところです。これからはモノの時代から人の時代であり、地方には情報発信機能があります。出雲は三十分圏内に出雲と米子と、二つの空港があり、人口もようやく減少から増加に転じました」

と、天の時、地の利、人の和が出雲にあることを強調した。神話の里・出雲の地で小松氏は出雲発のベンチャー企業出現という神話をつくろうとしているようだ。

大ヒット商品シートシャッター「門番」



を一民間企業が率先して行っているといつていいだろう。

アイデアマン・小松氏の活動の場は広い。平成元年に地元の建設業、運送業などの異業種六社と組んで、ハイテクと人間らしさの調和を目指して、「協同組合テクノくにびき」を設立。また次代のリーダーを育てることを目的とした「太陽乃國」構想を実践している。